
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 59

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1161. 深層意識の変化と日本の心象風景
- 1162. 変容と経済学
- 1163. タレントアセスメントの想定試験問題
- 1164. 確立された個の特性
- 1165. 向かう夢・追いかける夢・避ける夢
- 1166. 科学的思考と哲学的思考
- 1167. 口笛のこぼれる火曜日
- 1168. この夏のノルウェー旅行の計画
- 1169. 夢の中での祖父と祖母の会話から
- 1170. 音読と社会的カリキュラムについて
- 1171. 意味への意志と献身
- 1172. 『成人発達理論による能力の成長』の発売日の思い
- 1173. 書籍の出版日と重なる最終試験
- 1174. 西暦3000年に向かって
- 1175. エリク・エリクソンとダニエル・レヴィンソンのライフサイクル理論から
- 1176. 『成人発達理論による能力の成長』誕生から一夜明けて
- 1177. 仕切り直しと巨体の促し
- 1178. 神を支えるものと神に支えられるもの
- 1179. 課題の中から課題を通じて課題から外へ
- 1180. 知識と経験を適用する「能力」

1161. 深層意識の変化と日本の心象風景

フローニンゲン大学の一年目のプログラムを締め括る最終試験が二つ迫ってきているためか、それとも第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』が世に送り出される日が近づいてきているためか、私の無意識の層に荒波が立っている。それは肯定的なものでも、否定的なものでもないという印象を持っているが、そうした現象が私の深層意識で起こっていることは確かだ。それを表すように、ここ数日間の睡眠中の私の意識はいつもと異なっている。

昨夜は特に、夢の中で湧き上がったテーマについて文章を書き留めておこうとする欲求のようなものが強烈に湧き上がっていた。実際にそれを抑えることはできず、ある時点に到達すると、半覚醒状態の意識の中、私は自分の右手を使ってノートに何かを書き綴る仕草をしていた。半覚醒状態の私は、本当に文章を書き綴っていると思い、夢の中のテーマを逃さずに文章の形にできたことに安堵していたのであるが、意識がより鮮明になると、私はまだ寝室の中にいることに気づいた。さらには何もメモしていないことに気づき、少しばかり残念な気持ちになるのと同時に、滑稽な気持ちになった。

三つか四つほど、文章の形にしておかなければならない自分の考えのようなものがあり、それが何だったのかは、起床した私の意識からすっかり抜け落ちてしまっている。夢の中の自分を振り返ってみると、それは「何かに取り憑かれながら駆り立てられている」という表現では的確に自分の姿を表していないことに気づく。どうやら私は、よりふさわしい言葉を自分で見つけるときに差し掛かっているようだ。しかし、「何かに取り憑かれながら駆り立てられている」という言葉以上の言葉を見つけるのは簡単ではない。

今の自分の状態、とりわけ自分の無意識の状態を的確に捉えるような言葉を探していこうと思う。そうでなければ、当分この状態が収まることはないだろうし、進むべき次の場所に行くこともできないだろう。

早朝目を覚ましてみると、寝室の窓の向こうに燦々と輝く朝日が見えた。それを見たとき、天気予報が外れたことを少しばかり嬉しく思った。昨日見た天気予報によると、今日は雨のはずであった。だが、現実の今日は雨がまだ降っていない。

六月も第二週目に差し掛かり、日本はおそらく梅雨の季節だろう。日本の梅雨が私の中で一つの心象風景を成し、日本にいたなくても、日本の今の梅雨の様子がどのようなものであるかが、ありありと感じられる。もんわりとした生暖かさの中でしとしと降り続く雨。どんよりとした空に時折顔を覗かせる晴れ間。梅雨独特の空気感。そして、アジサイなど。

日本の梅雨を取り巻く様々な感覚や心象風景が、私の内側から消え去ることはない。これは、私の内側の深くに日本の姿が刻まれていることを示すのに十分であろうし、絶えず日本と私が繋がっているということを示すのに十分であった。

内側で蘇る感覚と心象風景とは打って変わり、実際の今の私を取り巻いている環境は幾分異なる。薄青色の空が広がり、乾燥した大地に穏やかな風が流れている。朝夕は涼しいというよりも寒いぐらいである。全てはこの生活の中にあり、全てはこの生活から始まるのだと思う。2017/6/12

1162. 変容と経済学

自分の無意識が馬車馬のように駆け巡り、飛翔する馬になろうとするようなイメージが突如として浮かび上がった。そもそも私の無意識自体を馬のような単一の生き物に還元すること自体おかしなことであるが、そのようなイメージが湧き上がってきたのは確かである。私の無意識そのものが一つの巨大な生き物であり、その激しい躍動感から馬のイメージが生まれたのかもしれない。無意識の表層にある私の顕在意識、すなわち、馬に乗る自分自身は、全くもって馬の手綱をうまくコントロールすることができていない状態だ。

ギリシャ神話の架空の生き物「ケンタウロス」にでもなったかのように、私の頭部以外は馬のようである。ここから私は、ケンタウロスを超えて、完全な人間になるか、完全な馬になるのか、はたまた別の姿になるのか、いずれにせよ何らかの変容を遂げなければならないだろう。

「飛翔する馬」というのは、変容後の自分の姿を現しているように思える。もしかすると、馬から馬へという現実の生物同士を繋ぐ形での変容ではなく、馬から竜へという架空の生物への非連続的な変容が起こると述べた方が正確かもしれない。その日が刻一刻と自分に近寄ってくるのがわかる。

昨夜の夢の内容をどうにか思い出そうとしたが、やはり一切のことが顕在意識の記憶から抜け落ちてしまっている。昨晚に考えていたことを思い出すことによって、夢の中の内容を思い出せるかもしれないと期待をしてみたが、どうもそれも難しいようだ。ただ、昨晚考えていたことを少しばかり書き留めておきたい。

昨晚考えていたのは、一つの領域内の問題に向き合う時、必ず他の領域の発想の枠組みや知識を活用しなければならない世の中になってきている、というテーマであった。例えば、私自身が人間の発達に関する社会の問題に取り組もうとするとき、人間の発達を直接的に扱う発達心理学の枠組みや知識だけを持ってしては、その問題を解決することはできない。なぜなら、特定の問題は確かに一つの固有の領域に深く根ざしているのだが、その領域自身が他の領域との関連の中に存在しているという性質上、その問題も必然的に他の領域と絡み合うという性質を持っているからだ。

こうした認識が私の内側で日増しに強くなっている。すなわち、人間の発達を取り巻く社会の具体的な課題に取り組もうとする意識と同時に、それらの課題に取り組むためには、その課題が根ざしている領域の知識だけではなく、その領域と複雑に絡み合う他の領域の知識を獲得することが不可欠であるという認識だ。そうした課題意識が、私を様々な領域の探究に向かわせていることに気づく。それは、複雑性科学や教育哲学の探究となって現れ始めている。

同時に、私は昨日の夕方、自分が日本のどこの大学を卒業したのかを強く自覚するような体験に見舞われた。母校の伝統に立脚する形で、私は経済学の発想の枠組み、とりわけ経済思想というものを真剣に学び直さなければならないと思った。

一昨年、日本に滞在していた時、経済思想への関心の萌芽が存在していたが、いよいよその芽を育てる時に差し掛かったのだと思う。その関心へ向かわせた最大の理由は、人間の発達や教育に関する問題に取り組む時、「経済」というのは切っても切り離せない領域であり、それらの問題の根幹に経済という領域が大きく横たわっていることに遅ればせながら気づいたからである。

昨今、人間の発達や教育が、既存の経済原理に絡めとられる姿を見るにつけ、もはやそれを放っておくことなどできないという思いが自分の中で日増しに強くなっていた。そのため、人間発達と教育に密接に関係し、多大な影響を与えている経済学の発想の枠組みをここから探究し始めたいと

強く思った。そのような思いに見舞われたのが、昨日の夕方であった。経済学の発想の枠組み、そして経済思想を理解せずして、人間発達や教育の問題に取り組むことなどではいけない、という極端な発想を持ちたいと思う。2017/6/12

1163. タレントアセスメントの想定試験問題

残念ながら、いくら思い出そうとしても昨夜の夢の内容を思い出すことができないので、眠りの意識に落ちる前に考えていたことを書き留めておきたい。それは実にたわいのないことであり、「タレントアセスメント」のコースの最終試験で出題されるであろう試験問題についてであった。この試験では、二時間の間に五、六題ほどの自由記述形式の問題に解答することが要求されている。今回の試験は、前の学期に履修した「創造性と組織のイノベーション」の最終試験と同様に、コンピューター上で解答することになる。

「タレントアセスメント」の最終回のクラスの時に、担当講師から、最終試験のサンプル問題が紹介された。それを見たとき、実によく練られた問題だと感心した。コースで学習した知識を単に頭に詰め込んだだけでは解けないような工夫がなされており、知識の想起と同時に、それらの知識を組み合わせながら解答していくことが要求される問題ばかりであった。中には、シンプルに問題文が一行のものもあれば、能力測定に関するケースを与え、習得した知識をもとに、そのケースに潜む問題を解決に導く案を記述させるものなどがあつた。

昨夜の私は、最終試験で出題されるであろう設問を列挙していた。いくつかそれらを書き留めておきたい。一つ目は、既存の知識や経験を頼りにする診断方法と統計手法を頼りにする診断方法の比較に関する論点だ。両者の妥当性の違いやお互いの方法の強みと弱みを記述させるような設問が想定される。

同時に、サンプル問題で取り上げられていたように、統計手法を頼りにする診断方法に対して、特定の立場に立脚した批判的な見解をケースで示し、その見解が立脚している立場や発想が何なのかを解答させる設問も想定される。それらの立場は大別すると、「技術的批判」「心理学的批判」「倫理的批判」に分けられ、それらの立場についてそれぞれの考え方を正しく把握しておくことが求められる。

二つ目は、心理特性に立脚した測定手法を活用するのではなく、測定対象と強く結びついた実際の具体的な行動を評価する方法のメリットとデメリットを解答させる設問だ。後者は通称、“work sample approach”と呼ばれており、この手法を活用した能力測定の強みと弱みを解答させる設問が想定される。

三つ目は、非認知的特性を測定することの意義と限界を問う設問である。近年、企業社会における人財選抜においても、教育現場における入学審査においても、非認知的特性に焦点を当てることの重要性が叫ばれている。そうしたことを背景に、非認知的特性に焦点を当てることの意義と、それらを測定することの限界やデメリットは何なのかを問うような設問が想定される。

四つ目は、一般的な知能指数をアカデミックなパフォーマンスの予測や業務上のパフォーマンスの予測に用いることには賛否両論があるが、それら二つの立場の意見が何なのかを実証結果をもとに具体的に解答させる設問が想定される。

五つ目は、入学審査において、マイノリティをどれだけ受け入れるのかに関するケースを出題し、ケースの中で大学側が実行した施策の問題点を指摘させる設問である。具体的には、例えば、大学側が認知能力を測るテストとライティングテストを組み合わせ、合格率を30%と設定した場合に、それがマイノリティにとってどれだけ負の影響をもたらし得るか、もしくは、仮にその施策を妥当だと判断するのであれば、それは統計的にどのような論拠によるものなのかを問う設問が想定される。

六つ目は、パーソナリティテストに潜む問題点、特に「性格偽装」の問題を指摘した上で、どういった点に問題があり、どういった点はそれほど問題ではないのかを実証結果をもとに解答させる設問が想定される。

その他にも細かな設問はいくつか思いつくが、私が今回の担当講師であれば、少なくとも上記の設問を出題してみたいと思う。午前中のこれからは、それらの問いへの解答をワードにまとめ、さらに細かな論点に関する設問とそれに対する自分なりの解答を準備したいと思う。2017/6/12

1164. 確立された個の特性

早朝の晴天とは異なり、昼食前あたりから天候が怪しくなり始めた。実際に、突発的な小雨が降ることもあった。現在は、分厚い雲が空を覆い、ところどころに晴れ間が差し込むといった空模様だ。午前中、「タレントアセスメント」のコースの最終試験に向けて、再度論文を読み返していた。試験で取り上げられる26本の論文のそれぞれに対して、重要論点をワードに書き出し、それらの論点に対して自分の言葉で論を展開できるように準備していた。午前中は、すでに準備した内容に対して、さらに肉付けするような作業を行っていた。

数日前に書き留めていたように、今回のコースを履修したおかげで、タレントアセスメント全般に関する知識基盤を随分と強固なものにすることができたように思う。ここで構築された知識を土台とし、さらに高度な知識を構築していく実践にこれから励むことになるだろう。それは、能力測定に関する実務作業に従事し、能力測定に関する新たな論文や専門書を読むことを通じて少しずつ実現されるだろう。今朝、改めて一つの自己を確立し、確立された自己を通じて何かを発言することの意味について考えていた。

私たちが一つの強固な点としての自己を確立するとき、それは固有な点であるがゆえに、固有の価値と真実を必然的に内包するものだと言える。つまり、一つの点としての自己を確立するというのは、自分に唯一付された価値と真実への目覚めが伴うように思うのだ。

私たちは、自己の内側に固有の価値と真実が横たわっていることを発見するとき、それを死守し、それを主張するような衝動に駆り立てられるのだと思う。これは利己的な主張をするということとは全く別次元の話であり、固有の価値と真実を毀損しようとするものへの断固たる抵抗であり、それらの価値と真実が公的なものとして開かれる必要性に根ざされた主張がなされるという話である。

思うに、真に一つの点としての個を確立した人間というのは、仮に全ての人間を敵に回したとしても、固有の価値と真実に基づいた主張をなすような人物なのだと思う。ユングが提唱した「個性化」やキーガンが提唱した「自己主導的知性」というのは、まさにそのような特性を兼ね備えたものであろう。

世間を眺めてみると、本来こうした特性を持つはずの個性化や自己主導的知性というものが、随分とその意味が希薄された形で受け取られているように思えて仕方ない。個性化を果たした人物や自

己主導段階に到達した人物というのは、自らの内側に存在する価値と真実に気づき、それを表現することを迫れた人物のことを指す。

他者とは異なる対岸に立って自らの主張を打ち出すことができるのかどうかというのは一つの試金石であり、これは無根拠かつ利己的な自己主張をすることとは性質を異にするものである。そのようなことを考えてみた時に、この現代社会において、真に個性化を果たしている人間や真に自己主導段階の知性を獲得している人間は、ほとんど存在していないように思えて仕方ない。2017/6/12

1165. 向かう夢・追いかける夢・避ける夢

数日ぶりに目覚めの良い朝だった。黄色く輝く朝日が寝室に差し込み、その光がまぶたに触れ始めた時、私は目を覚ました。目を開けてみると、身体も精神もここ数日とは異なり、適度な軽やかさを持っていた。昨日の夜は、「タレントアセスメント」で課せられている論文を大幅に修正することにし、分析をやり直していた。

分析の観点をより増やし、以前の分析よりも範囲と深度を確保するように試みた。論文の全てを一度書き上げていただけに、大幅な修正を施すことは、最初のうちこそためらわれたが、その修正が必然だということに気づいてからは、迷いなく修正を施していった。修正を施す時点で当然ながら、どのような流れからどういった項目をどのような理由から分析し、最終的にどのような結論に持っていくのかの大枠がすでに明確であったため、この修正作業は思っていた以上に速やかに行われた。

おそらく今日の午前中を持ってして、再び論文の全体が完成することになるだろう。プログラミング言語のRに関する随分とその操作が早くなり、Rの言語体系の基盤が確かに構築されたのだと知る。昨夜は結局、普段設けている就寝前の一時間の休息を取ることなく、就寝の直前までこの作業に没頭していた。そのため、睡眠の質が心配されたが、それは杞憂に終わった。

昨夜は夢の中で、三鷹から東京駅方面に向かう電車に乗ろうとしていた。その場面は、どうやら早朝のようであり、通勤ラッシュが最もひどい時間帯であった。私は旅行用の大きなスーツケースを携帯しており、駅の移動がとても大変だった。乗車予定の電車が駅構内に近づいてくるアナウンスを聞いた私は、急いで電車が止まるプラットフォームに向かった。

「3A」のプラットフォームに上るためにエスカレーターに乗った私は、電車の到着が目と鼻の先に迫ってきていることを知り、スーツケースを抱えながら、エスカレーターを急いで上がることにした。プラットフォームに到着すると、なんとか電車の到着に間に合ったように思えたが、その電車がプラットフォームに入ってくるや否や、想定していた箇所に停車するのではなく、私がいる場所よりもずっと遠い場所に停車した。

停車した電車に急いで向かったが、視覚の錯覚が起こり、その電車は反対のプラットフォームに停まっているようだった。結局、その電車に乗ることができず、私は少しばかり途方に暮れていた。しかし、東京の電車は途方に暮れることを許してはくれないほどに、次から次に別の電車がやって来る。私は携帯で次の電車を調べた。

ちょうど良い時間帯の電車を発見したところで、私はその電車が停まるプラットフォームに向かった。しかし、その電車に乗るには、今私が立っている駅からいったん外に出て、隣接する駅に行く必要があった。今いる駅を離れ、隣接する駅に向かってみると、おびただしい数の人が、駅と駅をつなぐ通路に待機し、その電車を待っているようであった。それを見たとき、私はその電車に乗ることを諦め、また別のルートで目的地に向かうことにした。

するととっさに、この時間帯であっても、三鷹から上野に行く電車であればそれほど混んでいないだろうと思い、その電車に乗ることを決心したところで夢から覚めた。どこかに向かう夢であり、何かを追いかける夢だった。同時に、人を避けるような夢だった。2017/6/13

1166. 科学的思考と哲学的思考

昨夜は就寝に向かう最中に、二種類の思考様式を意識的に鍛錬し続けようという小さな決心が芽生えた。それらの思考様式に関する鍛錬は、以前から行っていたはずなのだが、それは明確な意識のもとになされていたわけではなく、ひどく漠然とした鍛錬だったように思う。二つの思考様式とは、科学的思考と哲学的思考である。人間発達と教育の領域において、科学的な思考の枠組みと哲学的な思考の枠組みの両輪を持って仕事を進めていきたいという思いが日増しに強くなる。

同時に、それらの思考の枠組みの鍛錬が圧倒的に不足していることも痛感させられる日々である。二つの思考様式は共通点もありながら、それでいて明確に異なる点があるのも確かである。一方の

思考様式を用いて仕事を進めていくのではなく、それら二つの思考様式を携えて仕事を進めざるをえないところにまで自分はやってきたのだと思う。私の中で、一方の思考様式が欠けた探究はひどく偏ったものに思え、不満の感情が強く湧き上がる。

どちらかではなく、どちらの思考様式も活用していく形で今後の仕事を進めていきたい。科学的な知の構築と哲学的な知の構築を同時に進めていきたいと強く思う。そのようなことを考えながら、とっさに浮かんだ論文のジャーナル名を裏紙の余白に書き留めている自分がいた。そこに記載していたのは“Journal of Philosophy of Education”だった。

今朝、そのメモを見返し、早速目的のジャーナルを調べてみると、いくつか興味深いその他のジャーナルを見つけることができた。同時に、教育哲学に関する示唆に富む書籍を20冊ほど見つけることもできた。今この瞬間にはやるべき仕事他に存在するため、それらのジャーナルに掲載されている論文とそれらの書籍をすぐに読むわけではないが、今後必ずそれらに目を通すことになるだろう。いくつかのジャーナルとそれらの書籍のタイトルを参考文献リストの中に記録しておいた。

今日の午前中はまず、「タレントアセスメント」のコースの最終試験で出題されるであろう予想試験問題を自分で作成し、それに回答するを行いたい。ここ連日連夜、就寝前に予想問題を頭の中で作成し、それらに答えるということを頭の中だけで行っていたので、今日はそれらを実際の文章の形にしておきたいと思う。自分が作成した五、六題ほどの予想問題に解答することができたら、その流れで、このコースで課せられている最終論文の修正を行いたい。昨夜、煩雑なデータ分析を無事に全て完了することができたため、後はそれらの結果をもとに文章を書いていけばいいだけだ。

何をどのような流れで書くべきかは、すでに頭の中で明確な形になっているため、論文の修正はそれほど多くの時間がかからないであろう。とりあえず、今日の午前中はそのような作業に取り掛かる。

2017/6/13

1167. 口笛のこぼれる火曜日

口笛を思わず吹きながら歩いてしまうかのような午後だった。午前中の仕事を終え、昼食後に行きつけの美容室に足を運んだ。毎回、私はロダニムという美容師に髪を切ってもらうのだが、一つの

専門領域で個を確立し、技術を磨き続ける人間とは非常に話がしやすい。ロダニムはそんな人間の一人だ。

いつものように、フローニンゲンの天気の話を含め、たわいもない話題から対話が始まった。おそらく、オランダ人は今の季節のことを「夏」だとみなすのだと思うが、私からしてみれば、それは「春」である。日の出と日の入り時間は確かに夏のそれだが、気温の快適さはまさに春そのものだと言っていい。一昨日、何気なくフローニンゲンの年間の気温の推移に関するデータを眺めてみたところ、来月の七月が年間を通して最も気温が高く、今月と八月は年間で二番目に気温が高い月となる。

今月も半ばに差し掛かりつつあるが、それでも非常に爽やかな気温である。さすがにもはやジャケットを羽織ることはなくなったが、自転車に乗っている人たちはジャケットを羽織っている姿をよく見かける。

ロダニムと天気の話若干したところで、夏の休暇に関する話題となった。なにやらロダニムは、スペイン領の小さな島に奥さんと十日ほど旅行に出かけるそうだ。モロッコに近い島とのことであり、そこは人も多くなく、お勧めな場所とのことである。私は、八月の半ばにノルウェーに行く予定であり、そのことをロダニムに伝えた。

ロダニムも過去にノルウェーを訪れたことがあるらしく、ノルウェーの自然の雄大さは圧巻だったそうだ。まさに、私が今回の旅に期待しているのも、そうした自然の雄大さに触れることであり、その他に望むことは特にない。ノルウェーの深い森や雄大なフィヨルドに触れながら、その場所でゆっくりと七日間ぐらい過ごしたいと思う。ロダニムから提案があったのは、せっかくならデンマークに行き、その足でノルウェーに向かうというものだった。

未だデンマークには足を踏み入れたことがないので、その案も確かに良いかもしれないと思った。その後もロダニムと雑談をしていると、あっという間に時間が経ち、散髪が終わった。美容室を出た私は、行きつけのチーズ屋に立ち寄り、今日はチーズを買わずナッツ類だけを購入した。チーズ屋を後にした私は、思わず口笛を吹きながらフローニンゲンの街を歩いていた。

全ての物事が、一つの摂理の中で静かに流れていくような感覚が私の内側にあった。取り巻く自然も、自分の人生も、全ての事柄が静かに、そして着実にあるべき方向に向かっているような気がしていた。2017/6/13

1168. この夏のノルウェー旅行の計画

散髪を終え、自宅に戻ってくると、美容師のロダニムが述べていたように、デンマークを経由してノルウェーに旅行する案を検討し始めた。調べてみると、それは十分に実現可能だとわかった。また、何度も訪れているアムステルダム国際空港から、飛行機に乗ってノルウェーに行くのは少々味気ない気がしており、陸路を通してノルウェーに向かう方がずっと趣があるように思えた。フローニンゲンからコペンハーゲンまでは、バスと電車を乗り継いで、十時間弱で着いてしまう。

昨年の夏にドイツへ旅行に出かけた時と同じように、フローニンゲンからドイツの北西部の町リアーまで高速バスで向かい、リアーからブレーメンで乗り換えをして、ハンブルグまで電車で向かう。ここまでは、ライプチヒを訪れた昨年の行路と全く同じである。そして、ハンブルグからはコペンハーゲンの中央駅まで直通で行ける電車に乗る。早朝の七時あたりに出発すれば、夕方の五時ぐらいにコペンハーゲンに到着できるという計算だ。

ぜひ行きはこの経路を活用し、西欧から北欧へと移るまでの景色の変化を堪能したいと思う。ロダニムと話をするまで、デンマークに行くという選択肢は私の頭の中になかったため、彼との対話をとても有り難く思う。仮に、コペンハーゲンで二泊滞在するとして、そこからまずはノルウェーの首都オスロに向かう必要がある。調べてみると、コペンハーゲン中央駅からオスロまで直通のバスが運行していることがわかったが、バスに九時間乗るのは少し大変かもしれない。

もう一つの行き方は、コペンハーゲン中央駅から三時間ほどかけてニルス・エリクソン駅まで電車で向かい、そこからノンストップのバスに三時間半ほど乗ってオスロに行くというものだ。こちらの方が自分にとっては良さそうである。正直なところ、オスロには用事がないため、一泊に留めるのか、二泊するのかは改めて少し考えたい。オスロで足を運びたいのは、今のところ、ムンク美術館とオスロ国立美術館の二つだ。

それら二つの美術館を巡れば十分であり、あとは市内の街並みをゆっくりと堪能したいと思う。そこからは私は、ベルゲンというノルウェーの西端の街に向かう。この街を知ったのは、昨年の夏に、日本を出発する前日に宿泊していた日航ホテルのラウンジで偶然手に取った旅行誌がきっかけだと記憶している。その旅行誌を眺めた時の印象はとても強く、その他にも魅力的な街がノルウェーにあるにもかかわらず、私はこの夏、ベルゲンでゆったりとした時間を過ごしたいと思う。

オスロからベルゲンまでは、直通で電車が運行しており、六時間半ほどの列車の旅になる。これは私に期待感を抱かせる未知なものなのだが、オスロからベルゲンまでの列車の景色がどのようなものなのか、今の私には全く想像がつかない。そこには未だかつて見たことのないような、雄大な自然が広がっていることを強く願う。雄大な景色への夢想の中、一応、帰路についても調べておいた。

さすがに帰りは列車の移動は大変であろうから、飛行機で帰る方法を探した。すると、うまい具合にベルゲン空港からコペンハーゲン空港もしくはオスロ空港を経由して、フローニンゲン空港に到着する飛行機があることがわかった。この夏は、こうした経路を辿るノルウェー旅行を実現させたい。

2017/6/13

1169. 夢の中での祖父と祖母の会話から

早朝からモーツァルトのピアノ協奏曲が書斎の中を駆け巡る。ここ最近では、仕事をする時はいつもモーツァルトのピアノ協奏曲を聴いている。全部で11時間半にわたるモーツァルトのピアノ協奏曲を絶えず流していると、音楽というものが私にとって、断続的に摂取する空気や水以上に大切なものに思えてくる。今この瞬間に流れてきている協奏曲を聴いていると、どこか心が洗われるような気持ちになってくる。それらは、一日を始める早朝の時間帯に聴くのがふさわしい曲のように思われる。

昨夜は、とても印象的な夢を見た。夢の中で、亡くなった二人の祖父が現れた。二人の祖父は、経済と政治に関する談話をしているようであり、私もその中に入れてもらった。しかし、私は二人の会話についていくことができず、「経済と政治について深く学ばなければならんよ」という言葉を二人の祖父から優しく投げかけられた。

夢の中の私は、その言葉を受ける前から、経済と政治を深く学ぶことの重要性を自覚していたようであったが、その言葉を受けることによって、改めてその思いを強くしたようだった。また、夢の中の私を見ている私も、二人の祖父の言葉は正鵠を射ているように思え、これからの私の仕事を全く違った次元で推し進めていくためには、経済と政治に関する深い理解が必須であると思っていた。

祖父たちの談話が静かに終わると、私は母方の祖母と話をしていた。忌憚なく、率直な物言いをする祖母は、経済と政治を深く学ぶことの重要性を祖父たちとは全く違った角度と言葉を持って私に伝え始めた。祖父たちからは、男性原理に基づいた経済と政治に関する重要性を教えられ、祖母からは、女性原理に基づいた経済と政治に関する重要性を教えられたように思えた。ただし、その時の私は、祖母の言葉を素直に聞くことができず、偽りの理論武装が施された鋭利な言葉を四つか五つほど立て続けに、祖母に対して静かに投げかけた。

振り返ってみれば、もしかすると、祖父たちの言葉よりも、祖母の言葉の方が今の私にとって重要なものを含んでいたような気がしている。祖母の言葉を素直に受け入れることができなかつたことには何か意味があり、それは言葉の投げかけ方というよりも、祖母の言葉に含まれている本質が、今の私と相容れないようなものだったように思えるのだ。

祖父と祖母の言葉をそれぞれ単純に、男性原理と女性原理という区分けをしたが、仮にその分類が正しいものであるならば、私の内側は依然として男性原理が優位な状態なのかもしれない。人は内面の成熟を遂げる過程で、自らの男性性と女性性を統合し始める。それを踏まえると、夢の中の祖母の言葉を真に受け入れる日が来ることは、私の内側で両性が統合されたことを意味するのだろう。祖父と祖母との会話を終えたところで、日本人のある著名な女性教授が私の家を訪れた。

私はその教授のことを知らなかつたが、その教授が著名な人物であることはなんとなくわかつた。その教授の専門は、確か経済政策であつたと記憶している。午前9時から午前11時まで、その教授から一対一で教えを受けた。それが終わったところで、私は夢から覚めた。

私は、その教授から何かしらのものを得ている実感があつたが、具体的な内容については覚えていない。夢の中で現れた祖父と祖母こそが、私に本質的なことを伝える権化であり、その次に現れた教授は単なる飾り物か道化師のようなものに思えて仕方なかつた。2017/6/14

1170. 音読と社会的カリキュラムについて

十字架を描くような飛行機雲が、広大な空に行き交っているのが見えた。午前中、「タレントアセスメント」のコースで取り上げられた全ての論文の内容をまとめた資料を、無心になって音読をしている自分がいた。以前の日記にも書き留めておいたように、ひよっとすると、私の脳の特徴は、黙読よりも音読に合致しているのではないかと思った。そのように思うほど、音読によって文章の内容理解が格段に進んでいることを実感している。

音読をする過程で、自分の理解が不十分な箇所は、自分の言葉でその記述内容を即座に言い換えるということを行っていたり、疑問点がある箇所については、その都度自分の質問を声に出し、その質問に対して自分なりの仮説や回答を口に出すということが自然となされる。こうした姿を見るにつけ、音読というのは、非常にアクティブな読解方法なのだと思う。黙読をしている時は、どうしても字面を追いかけがちであり、その都度立ち止まることや、疑問点を自分なりに洗い出し、それらに対して自分なりの仮説や回答を打ち出すということはなかなか起こりにくい。

もちろん、黙読の中でそのようなことをできる人もいるであろう。私の場合に限ってみると、どうやら自分は、黙読を通じてそのような学習運動を行うことはできないようだ。そうしたこともあり、置かれている環境や状況が許す限り、何かしらの論文や書籍を読む際には、それらの文献とのインタラクションを意識した音読を心がけたいと思う。

先ほど昼食をとりながら、とりとめもないことをいくつか考えていた。そのテーマは二、三にわたる。あえてここで書き留めておくとするならば、それは、ロバート・キーガンが指摘したように、文化的なカリキュラムは常に私たちを何らかの方法で教育しているということだ。文化的なカリキュラムというのは、社会的なカリキュラムと言い換えてもいいだろう。それは、組織を含めた社会に根ざす集合的な発想の枠組みや制度的な仕組みのことを指す。

そうした集合的な発想の枠組みや制度的な仕組みは文字どおり、私たちの脳そのものと精神そのものを規定する、ということを最近強く実感している。もちろん、私たちが脳や精神の発達を遂げていくために、それらの社会的なカリキュラムは必須のものである。キーガンも指摘するように、特に慣習的な段階に私たちを導くために、社会的なカリキュラムは大きな役割を果たしている。しかし、そ

れ以上の段階の精神を涵養していく際に、既存の社会的なカリキュラムはほとんど効果をもたらさない。

むしろ、それは高度な精神性を獲得していく際の妨害となることすらある。日米欧で生活をする事を通じて、各国に固有の社会的なカリキュラムが存在するのと同時に、それらのカリキュラムには普遍的な特性があることに気づく。特に、ある一定段階の精神性を確立することに対して、そうしたカリキュラムは貢献を果たす一方で、ある段階を超えていく精神を確立することを阻害するというのは共通の特徴である。

これはよくよく考えれば、社会的なカリキュラムがそもそも、市民をある一定のところまで教育することを促す装置のようなものであるがゆえに、ある基準値を超えた段階に至る人にとっては、その教育効果はほとんど無いに等しく、時に害悪ですらあるというも納得できる。こうしたことを考えると、教育効果の差はあるにせよ、社会的なカリキュラムというものが、全ての人たちを多かれ少なかれ規定することに変わりはないようだ。

組織というマイクロな単位の社会的カリキュラム、社会全体というマクロな単位の社会的カリキュラムが、どのような種類と性質を持っているのかを把握しようとする事は、それらが私たち一人一人にどのような影響を与えているのかを理解することにつながり得るがゆえに、この世界で生きて行く一人一人にとって、自分を呪縛する社会的カリキュラムを認識することは極めて重要なことのように思える。

1171. 意味への意志と献身

今日も爽やかな風が書斎に吹き込む一日である。北欧にほど近いオランダのこの地において、六月半ばの気候というのは、大変過ごしやすいものなのだということを知る。今年の今頃は、私はまだ日本に滞在しており、日本の梅雨を経験していたように思う。日本の梅雨が自分の中で消しきえることのできない心象風景の一つを成しているのは紛れもない事実だが、日本の梅雨がどのようなものであったかを忘れてしまうかのような気候の中に今の私はいる。

食卓の窓から景色を眺めると、一つの飛行機雲が別の飛行機雲の上を通過していた。それを目撃した瞬間、改めて人間の仕事の性質について考えいていた。つくづく、私たちの仕事は、過去の人たちの仕事を基礎にして成り立ち、私たち自身の仕事は次の世代の人たちの基礎になるのだとい

うことを思う。そのようなことを思うと、毎日の自分の仕事がいかに過去の人たちの仕事の上に成り立っているかがわかる。また、今日の自分の仕事が明日の誰かの仕事につながっていることがわかると、今日の自分の仕事の中に大切な意味を見出すことができる。日々の仕事に意味を見出し、意味を積み重ねていくことは、私にとってとても大切なことなのだ。

自分の仕事が過去の誰かの仕事の上に成り立ち、今日の自分の仕事が明日の誰かの仕事の基礎になることを知れば知るだけ、毎日の自分の仕事を書き残しておくことが重要なことのように思われた。それはもちろん、自分が他の人のどのような仕事の上に立脚して日々の仕事を進めているのかを把握するためでもあり、自分がどのような方向性に向かって歩いているのかを知るためでもある。日々の歩みを観察し、それを書き留めておけばおくほどに、日々新たな意味を仕事に見出し、それが毎日少しずつ堆積していくのがわかる。

こうしたことを日々実感すればするほど、意味の総体というのは、待っていて見出されるようなものでは決してないと思う。意味を見出そうとする私たち人間の根源的な欲求に従いながら、絶えず意味を発見しようと尽力し、何も見出すことができなかつたとしても、それすらも自己の経験に刻み込んでいく過程の中で、意味の総体というのは徐々に姿を現してくるのだと思う。

仕事や人生における意味というのは、降ってこないのだ。それらは突然自分の目の前に現れることがあつたとしても、その背後には、膨大な蓄積があるのだ。その蓄積をもたらすのは、意味を見出そうとする意志であり、意味を積み重ねていこうとする献身にある気がしてならない。2017/6/14

1172. 『成人発達理論による能力の成長』の発売日の思い

いよいよ本日から、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』が発売となった。日本とオランダの時差の都合上、日本において本書が世に送り出される瞬間は、オランダにおいてはその前日の夜であつた。第一弾の作品を世に送り出した時と同様に、当然ながら、本書が世の中からどのような反応を得て、どのような評価を受けるのかというのは、書籍を執筆するいかなる著者と同じように、気になることではある。

しかし、前回の出版時に比べると、今回の出版は、前回と異なる種々の感情を自分に抱かせていることがわかる。前作以上に今作に期待する気持ちがある一方で、前回以上に冷静に事を見守ろうと

する自分がいるのは確かだ。この喩えが適切なものかわからないが、第一子の誕生と第二子の誕生の違いがそこにはある。どちらも極めて重要な出来事でありながらも、両者の間に諸々の違いがあることは明らかだ。

今回は特に、私が日本を離れて生活をしているという都合上、書籍が誕生した瞬間を日本で迎えることができなかった。また、出版に際して著者用に頂ける書籍もオランダに送ってもらうことをしなかったのも、私はまだ自分の書籍の実物に触れていない。これはどこか、自分の子供が日本で誕生し、親である本人が国外にいるがゆえに、自分の子供を抱くことができない感覚に似ていると言えるかもしれない。そのような感想を持ったのが、昨日の夜のことだった。

そこから一夜明けた今朝、この時間帯においても日本はまだ書籍発売の昼である。早朝目覚めた時も、今日はまだ書籍の発売日であることに変わりはない。上記の気持ちを抱きながらも、やはり非常に冷静な心境に今の私はいるようだ。もちろん、今の私を取り巻く状況が相変わらず忙しいものであることに起因するのかもしれない。

実際に、今日はこれから「タレントアセスメント」の最終試験があり、日曜日にはこのコースの論文の提出、月曜日には「成人発達とキャリアディベロップメント」の最終試験が続く。そうした最終試験と課題に並行して、日本企業との共同プロジェクトを数件進めていく必要がある。こうしたことから、書籍だけを気にかけている余裕がないというのは確かなようだ。

数日前から、父と小説の創作についてあれこれとメールで意見交換をしている。辻邦生先生の『小説の序章』という書籍を父に勧めたところ、父は早速それを購入したようだ。到着次第それを読み進めるということであり、読了後、ぜひ一度父とその書籍の内容を含め、小説の創作について直接に話をしたいと思う。

小説の創作についても、断続的に小説を執筆していくのではなく、いかに毎日執筆していくかがカギになるのではないかと思う。まさに、第二弾の作品の内容は、これまで書き留めていた日記が元になっている。そうしたことを考えていると、今このように書き綴っている日記というのは、今後の作品の原型であり、これからの作品にとって無くてはならないものだという気持ちになった。第二弾の

作品に対する世間の動向を伺いながらも、それとは離れたところで粛々と自分の仕事を進めていきたいと思う。2017/6/15

1173. 書籍の出版日と重なる最終試験

第二弾の書籍が発売された当日、オランダにいる私は、フローニンゲン大学での一年目のプログラムの最終試験に追われていた。

今朝、起床した瞬間に、書籍のことと最終試験のことがどちらも同じぐらいに気になっていることに気づいた。とはいえ、すでに出版されてしまった書籍よりも、目前に迫った最終試験の方が重要度が高いと思うようにし、試験の準備に精を出した。

五時半に起床すると、すぐさま書籍の告知を行い、そこからは最終試験に向けた最終確認を行っていた。今日の午前中に行われたのは、「タレントアセスメント」の最終試験だった。この試験はコンピューターを通じて行われるものであり、コンピューター試験専用のキャンパスに向かう必要があった。雲が少しばかり見えながらも、太陽の光が優しく降り注ぐ中、私は自宅を早朝に出発し、試験会場に向かった。

試験会場までは歩いて25分ほどであり、適度な運動である。早朝のこの時間帯は、通勤・通学の人が多く、多くの方は自転車で各々の目的地に向かっていて。そうした中、私は運河沿いのサイクリングロードをゆっくりと歩きながら目的地に向かった。目的地に向かう道中、切り替えたはずの自分の意識が、一步一步の足取りに応じて、本日出版された書籍の方に向かっていくのがわかった。

どのような方たちが本書を読んでもくれるのか気になっていたのと同時に、どれくらいの人たちが本書を手にとってくれるのかが気になっていた。道端の木々の間から、小鳥の綺麗な鳴き声を聞いた時、そのようなことを気にかけている自分が可笑しくなった。小鳥の鳴き声は、「書籍は必要な人のところに届くから心配ない」ということを私に伝えようとしているように思われた。小鳥の鳴き声に後押しされる形で、そこからの私は、試験に向けて意識を集中させていった。

計画通りの時間に試験会場に到着した私は、試験に向けて最後の確認を行っていた。コンピューター試験が行われる広大な部屋に入り、自分の席を確認した私は、一息ついてから試験を開始さ

せた。思えば、昨年に初めてフローニンゲン大学でコンピューター試験を受けた時、その操作にいくぶん手間取っていた。その時の自分がとても懐かしい。今となっては、その操作にも慣れ、同じ自由記述形式の試験であっても、手書きよりもコンピューターの方が望ましいと思うようになった。試験問題は大問五題であり、各大問の中にいくつかの小問が入っているという構成だった。

各大問の制限字数は、250-300字だった。最初に試験問題を全て確認すると、全ての問題が私が作成した予想問題とほぼ同じであったため、特に焦る必要もなく、淡々と全ての設問に回答していった。手書きの試験であれば、二時間の間に制限字数一杯の英語を書き進めることは難しいが、コンピューターであったため、終わってみると結局、全ての設問に対して制限字数近辺の回答を行っていることに気づいた。

昨夜の就寝前からどのような試験問題が出題されるのか非常に楽しみにしており、非常によく練られた問題であったがゆえに—同時に自分の予想とほぼ合致していたがために—回答するプロセスそのものが、大きな喜びを私にもたらすものだった。教育において試験というのは、さらなる学習を支援していく上で不可欠のものであるため、それは避けようのないものであるが、試験というのはこのように、それに回答するプロセスそのものが面白く、回答する過程そのものが学びの一つであるようなものでなければならぬと改めて思った。

納得のいく形で試験を終えた私は、試験会場を後にした。試験会場を後にした私は、試験の内容に関する振り返りを歩きながら行い、同時に、「今日は少しばかり出版された書籍について考えてもいいだろう」という思いから、再び書籍について思いを巡らせていた。月曜日に行われる「成人発達とキャリアディベロップメント」の試験が終われば、二ヶ月半にわたる夏期休暇に入る。2017/6/15

1174. 西暦3000年に向かって

「タレントアセスメント」のコースの最終試験を終えた私は、自宅に戻ると、すぐさま「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースの最終試験に向けて、取り上げられた21本の論文を読み返すことにした。この歳になってようやく、知識というものがどのような性質を持つものであり、どのような方法やプロセスによって知識の体系が自らの内側に構築されていくのかが見え始めている。これはもち

ろん、認識論や発達理論を学んできたことが幾分貢献しているだろうが、それよりもむしろ、自分の中での苦悶と格闘する中で、徐々に知識の性質やその体系化の道筋を掴んでいったと言える。

しかしながら、現在になってようやくそれらを掴み始めたというだけであり、知識には、今の私にはまだ見えていない性質が無限に残されているのも確かだろう。一つ一つの知識と向き合う中で、そして、それらを一つの体系として構築していく過程の中で、知識の本質を今後も探究し続けたい。知識が持つ性質とその体系化の道筋が見え始めているというのは、今の私にとってとても朗報である。

冒頭で、「この歳になってようやくそれに気づき始めた」ということを書いたが、この歳で気づき始めることができ嬉しく思う。というのも、一昨日の就寝前に、またしても自らに残された時間について考えを巡らせた時に、自分の仕事がようやく始まりを迎えたにすぎないことを知ったからである。つまり私には、多くのことを徐々に積み重ねていくための時間的猶予が残されているということを知ったのだ。

もちろん、人生において時の流れは残酷なまでに早いように感じることもある。その一方で、人生というものが一つの緩やかに進行する流れだと感じることもある。どちらもおそらく正しい認識であり、一人の人間がなすべき仕事を考えてみたときに、人生というものは、後者の認識の中で日々の仕事を深めていく形で進んでいくことが望ましいように自分には思える。

一昨日の就寝前は、西暦3000年における自分について思いを巡らせていた。その西暦を迎える頃、私は115歳になっている。人生というのは一瞬先に何が起こるかかわからないが、仮にその歳まで生きることができていれば、今と変わらないような精神性を持って日々を過ごしたいと思う。

あるいは、今の自分には見えない境地の精神性で毎日を過ごしたいと強く思う。就寝前というのは、いつも奇妙な考えが芽生えるものであり、90歳から95歳までは、学術機関で何かを教える立場かつ学ぶ立場でありたいと思った。そこから、西暦3000年に向かっての20年、25年ほどは、ただ愚直に追求するべきものを追求し、創作するべきものを創作することに捧げるような時期にしたいと思った。

世間一般で言えば、90歳か95歳で退職した後に、それほどまでに時間が残っていることを私は大変嬉しく思った。仮に一人の人間における最も固有の特性が、一生涯にわたって不変であれば、私は最後の最後まで熱情を通して生きることになるだろう。

西暦3000年に向けて、私はできる限りの献身と準備を、今日という日々の中生活の中に具現化させていきたい。2017/6/15

1175. エリック・エリクソンとダニエル・レヴィンソンのライフサイクル理論から

昼食を済ませた私は、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースの最終試験に向けて、取り上げられた論文の再読を開始した。淡々と論文を読み進めていく中で、自己と社会に深く根ざした学びについて考えを巡らせていた。

私はこれからも、必然的に数多くの論文や専門書と向き合うことになるだろう。実際に、書斎の机には、この夏の休暇を利用して読みたいと思っている論文と専門書が山積みになっており、本棚にもこの夏の休暇を利用して再読をしようと思っている書籍がいくつもある。同時に、七月に英国のアマゾンに注文する予定の専門書が40冊ほどあり、それらを読む中で二ヶ月強の夏季休暇を過ごせることは、どれだけ至福なことかと思った。こうしたことが可能な境遇に対して、私は祈りを捧げなければならない。

また、祈りというものが本質的に、人知を超えたものに対する感謝と共に、そこからの実践的な生き方を形作るためのものであることを考えると、私は日々、祈りながら仕事に従事していかなければならない。ひょっとすると、これが信仰心を持った生き方の端緒なのかもしれない。祈り、働き、祈る。そのような形で日々を過ごしていきたいと強く思うし、すでにそうした毎日は私は過ごしているように思う。これからも、日々祈り、日々働くことを通じて、向かうべき場所に向かい、働くべき場所で働き、生きるべき場所で生きたいと思う。

先ほど論文を読み進めていると、改めて、エリック・エリクソンやダニエル・レヴィンソンのライフサイクル理論に引き込まれるように文章を迫りかけている自分がいた。確かに、構造的発達理論において、成人期以降の人間の内面の成熟というのは、年齢と直接的に結びつくものではないが、それでも年齢を基準とした発達課題というものも存在しているのは確かだろう。特に、その個人が置かれて

いるライフステージにおいて、エリクソンやレヴィンソンが指摘するような発達課題の妥当性は、未だに色褪せることはないように思う。当然、彼らが定義するライフステージの時期や特徴は、現代社会の性質と照らし合わせると、修正するべきところはあるだろうが、それでも彼らの理論の中に普遍的なものがあることは間違いない。

先ほどの私は、まさにそうした普遍的なものに共感する形で論文を読み進めていたのだろう。彼らの理論に照らし合わせて、今の自分の置かれている状況や行動特性を振り返ると、非常に納得することが多々ある。ここでは詳しく書かないにしても、自分がなぜ知識の体系を構築することに執着し、それを通じて成そうとしていることの意味などが、彼らの理論を通して考えてみると非常に腑に落ちる。同時に、これから私が直面しなければならない未知な課題が、自分のこれからの道の上に大きく横わたっていることも知る。

時刻はすでに夜の八時を迎えたが、辺りはまるで夕方のように明るい。世界のそうした様子は、今の私の内側の様子と完全に合致している。今後また深い闇が自分を訪れるのを知っているが、その先には常にこうした光があるのだと信じて歩みを進めていきたいと思う。就寝までにまだ論文を読む時間が十分に残されていることを知り、その光はまた一層強さを増した。2017/6/15

1176.『成人発達理論による能力の成長』誕生から一夜明けて

昨日、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』が世の中に送り出された。少しばかりそわそわするような気持ちに包まれながら、昨日を過ごしていた。

昨夜の就寝前は、普段と変わらずたわいもないことをあれこれと考えていた。覚醒意識から眠りの意識に落ちる直前、何かのテーマについて非常に重要な気づきを得ることができ、「そういうことだったのか」という閃きのようなものを得た。しかし残念ながら、その閃きを書き留めておくことをしなかったため、それが何であったかを覚えていない。その閃きが生まれる前に考えていたのは、第二弾の書籍についてであった。

昨夜の自分の気持ちを何かに喩えて表現すると、どのような言葉が生まれるかについて考えていた。即座に思いついたのは、「日本で生まれる第二子の出産に立ち会えない国外にいる父親の心境」というものであった。この言葉が生まれた時、自分でも思わず笑みがこぼれたが、それはそれなりに

的を得ているように思う。最初の作品は、日本で執筆し、それが世に送り出される時も、私は日本にいた。

また、出版後もしばらくは日本にいたため、ある意味、第一弾の作品の生誕前から生誕後の大部分の過程を日本で見届けることができたように思う。一方、今回の作品に関しては、執筆から世に送り出すまでの全てをオランダで行い、そして、それがどのように世の中に受け入れられるのかについても国外で見届けることになる。そうした事情から、上記のような喩えが生まれたのだと思う。

昔からお世話になっている知人の方が、「書籍を執筆するというのは、社会的な慈善活動だと思った方がいい」と述べていたことをふと思い出し、まさにその通りだと思う。今後の作品についてもすでにテーマと題材は整っているものの、それらをいつ頃から執筆するかについてはまだ未定である。

いずれにせよ、自らの経験と探究を通じて得られた知見を広く世の中に伝えていくことは、自分が担うべきことの一つの核にあるように思うため、今後もわかりやすい一般書を執筆していきたいと思う。実は、一昨年に日本に滞在していた時、お世話になっている編集者の方に初めてお会いさせていただいた時、一般書を執筆することに関して、強い抵抗感を持っていた自分がいたのは確かである。

そこから私は、一般書を執筆することの意味を模索するようになり、結局は知人の方が述べていたように、書籍の執筆によってもたらされる社会性が極めて重要な点であった。毎日毎日、自分に言い聞かせるように日記を綴っているが、やはり自分を捉えて離さない主題について書き続けなければならぬのだと思う。2017/6/16

1177. 仕切り直しと巨体の促し

昨日、「タレントアセスメント」のコースの最終試験が終わるや否や、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースの最終試験に向けて準備をし始めた。再度、コースで取り上げられた論文を全て読み返していると、八月にノルウェーに行く前に、最終試験が全て終わった後、一日ほどオランダ国内のどこかに足を運びたいという思いが湧き上がった。

そのようなことを考えていると、オランダ国内に限って言えば、ロッテルダムやユトレヒトにはまだ行ったことがないため、どちらかの都市に足を運んでみるのも悪くないと思った。そこで私は、両都市にある美術館や博物館を調べてみた。ところが、あまりめばしいものはなく、両都市に足を運ぶことがためらわれた。何か他に足を運んでみたい場所はないかと探していたところ、唯一見つかったのが、以前から気にかけていた「スピノザ記念館」である。

この記念館は、デン・ハーグから少し北の街に存在しており、昨年にデン・ハーグを訪れた時に立ち寄ろうかと思っていた場所だ。その時は、時間の都合上、この記念館に立ち寄ることができなかつたため、今回はこの記念館に絞って、日帰りのオランダ旅行に出かけるのも悪くないと思った。最終試験後にこうした場所に足を運びたいと思う自分について、最初は現実逃避の一種かと思ったが、最終試験の終了をもってして、何かを明確に区切り、再度新たな気持ちで日々の仕事と探究を仕切り直したいという思いがあったのかもしれない。

正直なところ、毎日毎日、自分の中では仕切り直しのような現象が起きているのを実感しているが、それをより明確なものとするための儀式として、スピノザ記念館に足を運ぶことは望ましいように思える。この仕切り直しをした後に、六月末から九月にかけて、とにかく集中的な読書を行いたい。自分を捉えて離さないテーマに関する論文と専門書を読むための身体を作り、そうした読書に集中できるための物理的かつ精神的な環境を整備したいと思う。

ほぼ確信めいているが、私は今後数年以内に、これまでの自分と連続していながらも、全く異なる次元で自らの精神生活を営むことになるだろう。それは、仕事と探究の種類と性質が、これまでのものとは明確に異なる形で知覚されることの中に現れるだろう。そこに向けた第一歩として、そしてそこに向けた重要な準備の期間として、六月末から九月を過ごしたいと思う。八月の中旬に行うデンマークとノルウェーへの小旅行は、自分にとって、非常に大きな仕切り直しの出来事になるだろう。

自分の内側で、また新しい巨大な何か蠢いているのがわかる。その巨体の促しに、私はもはや逆らうことはない。2017/6/16

1178. 神を支えるものと神に支えられるもの

今日は曇りになると予想していたが、早朝目覚めしてみると、寝室の窓からほのかな朝日が差し込んでいた。太陽が沈む時間に合わせて就寝し、太陽が昇る時間に合わせて起床する日々が続いている。フローニンゲンの長い冬の時代においては、太陽の動きに合わせて生活リズムを作ることをいくら望んでも不可能であった。しかし、北欧に近いこの場所のこの時期の太陽は、私の理想とする就寝時間と起床時間に合致した動きをしてくれる。

五時を少し過ぎたあたりに起床すると、すでに小鳥たちが活動を始めていたようであり、小さく、それでいて美しいさえずりで私を出迎えてくれているようだった。今日は金曜日とのことだが、このところ時間感覚というものが消失し始めている。正確には、私の時間感覚がこれまでとは異なるものとなり、以前感じていたような時間的拘束が消失していると言った方がいいだろう。今の私は、毎日が月曜日だと言われても何も疑うことはないだろうし、毎日が土曜日だと言われても何にも疑うことはない。

「月曜日」や「土曜日」という言葉を聞いた瞬間に喚起される思考や感覚を疑わなければならない。そこで喚起されるものは全て、果たして自らの時間感覚と真に合致したものなのだろうか。それは相当に疑わしい。曜日の名前を聞いた時に喚起される意味や感覚は、社会と過去の自分によって構築されたものだと言えるのではないかと思う。良い悪いの問題ではなく、私はそのように構築された意味や感覚を検証しながらでなければ生きれなくなっているのだ。

この背後には、もう一度自分の手で、自らの時間感覚を取り戻したい、あるいは、自らの時間感覚を新たに構築したいという思いがあるのかもしれない。そのように考えると、上記で述べたような「時間感覚の消失」という言葉はやはり不正確であり、それは「新たな時間感覚の獲得」だとみなすことができる。あるいは、「自らの固有の時間感覚の復権」のような言葉を当てはめることができるかもしれない。いずれにせよ、時の感覚質が、これまでのものとはますます異なったものになりつつあるのは確かである。

昨夜の夢の中で、今年の三月にザルツブルグで行われた学会で知り合ったオランダ人研究者が現れた。彼女は、私と同じように、これから研究者としての道を本格的に歩むつもりらしい。夢の中で、

学会で知り合った他のメンバー二、三人を連れて、私たちはランチを共にした。レストランの席で、彼女が、裏紙に達筆な日本語を書いていることに私は感銘を受けた。よくよく見ると、彼女のノートには、ところどころ日本語混じりのメモが書き残されている。彼女がなぜ日本語を書けるのか不思議に思ったため、それを尋ねてみると、何やら小さい頃に日本語の教育を受けていたようだ。

彼女が裏紙に書き残した三文字の熟語は、強烈な印象を私に与えた。その印象を抱えたまま、私は夢から覚めた。夢から覚めてみると、実際の彼女は日本語を書くことなど全くできないし、日本に行ったこともないという話をしていた。だが、彼女が夢の中で書き残した三つの漢字が連なった言葉は、夢から覚めた私に対しても依然として強い印象を与えていた。

三つの漢字のうち、真ん中の文字が「神」であったことを鮮明に覚えている。その左右の漢字は何だったのだろうか……。神の両脇にいるものであり、神を支えるもの、そして神によって支えられるもの。それらの正体はいったい何なのだろうか。2017/6/16

1179. 課題の中から課題を通じて課題から外へ

今日は早朝の五時過ぎに起床し、毎朝の習慣である身体運動を簡単に済ませたところで、書斎の机についた。まずは昨夜の夢について簡単に振り返り、朝に思い浮かんでいる思念や感覚を言葉に書き留めておくという日課をこなした。その後、来週の月曜日に迫っている「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースの最終試験に向け、コースで取り上げられている論文を読み進めていった。

今朝は、書籍の発売からまだ一夜しか経っていないが、早速「新刊JP」さんに書籍の取材インタビューをしていただいた。とても有り難いことである。インタビューを終えた私は、論文の続きを読み、昼食前にランニングに出かけた。本当は明日ランニングに出かけようと思っていたのだが、嬉しいことに、今月からドイツに住むことになった知人が、フローニンゲンに明日遊びに来てくれることになったため、急遽、今日ランニングに出かけることにした。

今日のランニングは、地面に寄り添って走るというよりも、ランニングの最中に浮かんでくる思考や感覚と絶えず寄り添って走るという言葉の方が適切だった。走っている最中、一昨日辺りに考えていたことと関連して、再び笑みが自然とこぼれてきた。何に対して笑っていたかという、100歳の自分

からしてみれば、今の私の生き方やあり方の未熟さを間違いなく笑うであろうということが、非常に可笑しかった。当然ながら、今の私の生き方やあり方の一端は必ず今後の自分に受け継がれていく。なぜなら、過去の自分の段階を含みながら発達していくというのは、人間の成熟の肝にあるからだ。しかし一方で、100歳の時の自分は、今自分が課題だと思っている内面の問題を決して受け継いでいないだろう。

仮に100歳の時の私が、今日記に書き留めているようなことを書き続けていけば、世間は間違いなく嘲笑するだろう。日々の日記の中に書き留められる事柄は、今の私の発達段階に応じた課題から生まれてくるものであり、100歳を迎える時期において、今のような若い課題を持っているとは到底考えられない。だが、今の私のできることは、そうした課題と真摯に向き合うことしかないのだと思う。課題に向き合うというよりもむしろ、私は課題の中にあり、課題そのものが自己だと認識している。

内面の成熟の道は、課題の中から課題を通じて課題から脱却していくことの中にあるのだろう。ノーダープラントソン公園を走る中、将来の自分からの微笑ましい視線を感じていた。その視線を投げかける者に近づくためには、今この瞬間に走り続けているように、現在の課題を通じて毎日を生き続けなければならない。2017/6/16

1180. 知識と経験を適用する「能力」

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の中で取り上げている、「能力」というものがそもそも一体何を指すのかについて、改めて先ほど考えていた。私は書籍の中で、「能力」というものを、「これまでに培った知識と経験を具体的な状況の中の具体的な課題に対して適用していく力」と定義していた。この定義に関しては、今のところ大きな変更はない。

もしかすると、こうした定義を持つ能力に対して、能力というものが単純に、言語化できる力だけを指しているのではないかと誤解される方もいるかもしれない。しかし、私は本書の中で、人間の能力を言語化能力だけに限定して捉えていたわけではない。

ハワード・ガードナーの多重知性理論が指摘しているように、言語化能力というのも、一つの能力の種類に過ぎず、私たちの能力はそれ以外にも無数の種類がある。ただし、私たちが知識と経験を具体的な課題に対して適用していくことを継続させていくと、興味深いことに、その固有の領域内に

において、知識と経験を適用する理論のようなものが自分の内側に構築されていくのだ。これはまさに、ある領域や分野における「持論」と呼ばれるものである。そしてさらに興味深いのは、こうした持論の形成過程とその産物が何に如実になって現れるかという点、その最たるものが言語なのだ。

そして、知識や経験の適用力の差異、つまり持論における構造的な差異は、その人が用いる言語の中に如実に現れるのだ。これは言語優位型というタイプ論的な話とは関係なく、仮に言語優位型のタイプでなかったとしても、知識と経験の持論はその人の言語の中に現れる。

カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論におけるレベル尺度は、言語化の巧拙を問うものではないことを書籍の中で言及していたように思う。また、それは言語化された内容だけに着目するのではなく、語られている知識と経験をいかに一つの理論としてまとめ上げていくかの構造の中に現れる差異に着目していくものである。

本書に記載されていない表現で言えば、能力というのは、知識と経験を一つのメンタルモデルとして構築し、それを目の前の具体的な課題に適用していく力だと捉えることができる。そして、構築されたメンタルモデルの中に、多様な質的差異があるのだ。それは、単純な構造から徐々に複雑性を増していき、より洗練されたメンタルモデルになっていく。フィッシャーが提唱した12個のレベル表記はまさに、メンタルモデルの複雑性の区分だと述べていいだろう。

私たちがより複雑な問題に直面する際には、その問題と同等以上のメンタルモデルを活用しなければ、その問題を解決していくことができない。ここでも重要なのは、繰り返しになるが、そうしたメンタルモデルというものは、それが自然言語にせよ、数学言語にせよ、言語的(記号的)なものであることに変わりはないということである。2017/6/16